平成２１年１月の解説（週間天気予報）

【１月の天候状況】

上旬前半の冬型の気圧配置が後半にはゆるみ、旬末には本州の太平洋沿岸を低気圧が通過したので、北・東日本の太平洋側を中心に雪や雨となりました。中旬前半は日本海に停滞した低気圧の影響で、日本海側では曇りや雨の日が多くなりました。後半から下旬にかけても冬型の気圧配置は長続きせず天気は周期的に変わり、低気圧に向かって暖かい南風が吹いたために北日本を中心に高温となりました。また月末には本州の太平洋沿岸を通過した低気圧の影響で東北地方と関東・甲信地方を中心に大雨となりました。月を通しての日照時間は東日本の日本海側で平年よりかなり多く、北日本の太平洋側ではかなり少なくなりました。降水量はほぼ全国的に多く、特に北・東日本の太平洋側で平年よりかなり多くなり平年の400%を超えた観測地点もありました。気温は北日本で平年よりかなり高くなり、月平均気温が高い記録を更新して１位になったところがありました。

【１月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は、全国平均では例年(注) より 3 ポイント高い 75%で、関東甲信、東海、中国、九州南部地方で例年より 5 から 6 ポイント高く、特に沖縄地方では 17 ポイント高くなりました。最高気温（2～7 日目の平均）の予報誤差はほぼ全国的に例年並みとなり、全国平均では例年より 0.1℃小さい 2.1℃でした。最低気温（2～7 日目の平均）の予報誤差もほとんどの地方で例年並みとなり、全国平均では例年と同じ 2.1℃でした。

(注) 例年値は気象庁ＨＰ（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【１月の週間天気予報から】

図１は、平成２１年１月２１日と２２日の２１時の地上天気図です。２２日の日本付近は２つの低気圧を含む深い気圧の谷が通過したため、全国的に天気が崩れました。また、この気圧の谷に先行して、２１日には別の低気圧が本州南岸を東に進んだため、西日本

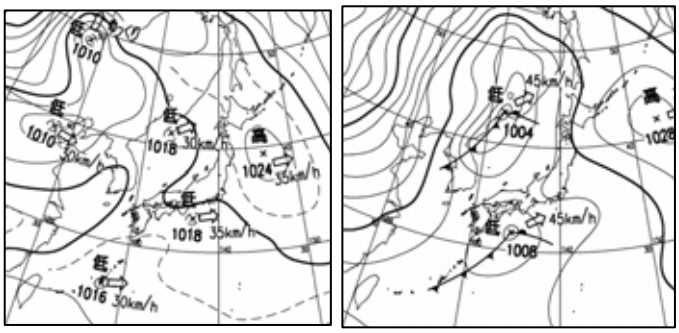

図１　地上天気図（左：1 月 21 日 21 時、右：1 月 22 日 21 時）

と東日本では２１日も雨が降りました。

図２は、１月１６日発表の週間天気予報に使用した２１日と２２日の予想気圧配置です。２１日夜には高気圧の中心が日本の東海上にあって、本州付近には明瞭な低気圧は予想されておらず、降水域も東シナ海の気圧の谷に対応する領域（南西諸島周辺）にしか予想されていませんでした。２２日は深い気圧の谷が本州付近まで進んできて、降水域も関東地方を含め広い範囲に予想されていました。このため、東京地方については、雨の降り出しは２２日になってからと判断し、２１日の予報を「晴れ時々曇り（降水確率２０％）」、２２日の予報を「曇り一時雨（降水確率５０％）」と発表しました。翌日以降の週間天気予報でも、２１日の予想図では降水域が西日本まで広がったものの、東日本にはほとんどかかっていなかったため（図３）、雨の降り出しを２２日とする判断は変わりませんでした。実際には、深い気圧の谷に先行する低気圧の影響により、東京地方では２１日の夜から雨が降り始めたため、この日の雨を見逃す結果となってしまいました。

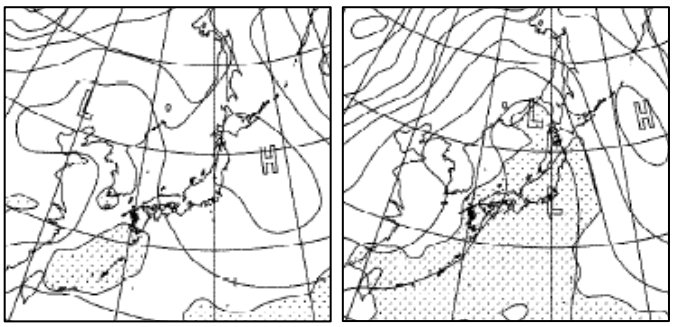

図２　1 月 16 日の予報で使用した 21 日 21 時（左）と 22 日 21 時（右）の予想図(水玉模様は降水が予想される範囲)

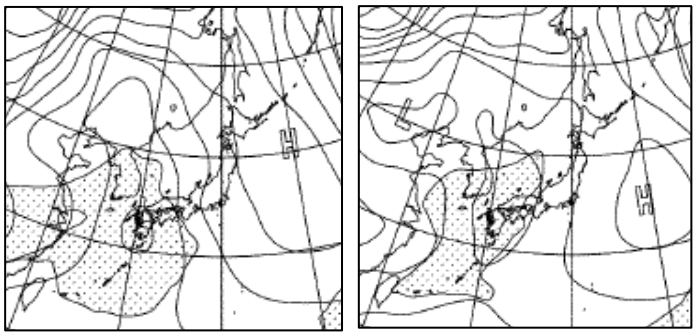

図３　1 月 17 日（左）と 1 月 18 日（右）の予報で使用した 21 日 21 時の予想図(水玉模様は降水が予想される範囲)

２２日のような深い気圧の谷は週間天気予報でも概ね予想できるようになってきましたが、２１日に本州南岸を東進したような小さな低気圧を数日前から適確に予想することは非常に難しく、直前にならないと予報できない場合があります。このように予報が難しい場合もありますので、できるだけ最新の予報をご利用願います。

【３月の週間天気予報の利用にあたって】

3 月は日本付近を低気圧と高気圧が交互に通過することが多くなります。低気圧が近づいてくると南風が吹いて気温が上がり、低気圧の通過後は北風が吹いて気温が下がります。このように大きな気温の変動を繰り返して次第に暖かくなります。3 月に週間天気予報を利用される際は、天気とともに気温の変化にも注目して健康管理等にご利用下さい。